

民の霊的覚醒 ネヘミヤ 7:1-5

1. 城壁が再建され、私がとびらを取りつけたとき、門衛と、歌うたいと、レビ人が任命された。私は、兄弟ハナニと、この城のつかさハナヌヤとに、エルサレムを治めるように命じた。これは、ハナヌヤが誠実な人であり、多くの人にまさって神を恐れていたからである。私はふたりに言った。「太陽が高く上って暑くなる前に、エルサレムの門をあけてはならない。そして住民が警備に立っている間に、門を閉じ、かんぬきを差しなさい。エルサレムの住民のうちから、それぞれの見張り所と自分の家の前に見張りを立てなさい。」(7:1-3)
 - a. 城壁と門が完成したが、まだ人々の生活と町の再建という仕事が残っていた。
 - b. 町の再建のための最初の仕事は、正しい場所に正しい人々を配置することであった。ある者はレビ人として神から任命され（レビ人は生まれつきレビ人であってなりたくてなれるものではない）、その他の者はその人格によりネヘミヤから任命された。
 - c. 町の品格や強さというのは、どれだけ武力があるかとか広さがあるかとか城壁が高いかとかによるのではなく、その町を形成するリーダーをはじめとする人々の高潔さや人格による。前の章ではおもだった人々がふさわしい行動をとらなかったため、ネヘミヤは何らかの予防措置をとらなければこの町は再び神の裁きを受けることを悟り、リーダーとして誠実で神を恐れる人々を任命し具体的な指示を与える。
 - d. これは今も同じである。神は来たる御国において権威ある地位に誠実な人材を置こうとされる。もちろんこの世で高い地位に就くということはすばらしいことだが、神が御国で用意してくださるものには及ばない。この世では高い地位に就いていたが、天の御国に入れないのなら死んだほうがましだと言った人たちもいた（ダニエルやネヘミヤなど）。

2. この町は広々としていて大きかったが、そのうちの住民は少なく、家もまだ十分に建てられていなかった。私の神は、私の心を動かして、私がおもだった人々や、代表者たちや、民衆を集めて、彼らの系図を記載するようにされた。私は最初に上って来た人々の系図を発見し、その中に次のように書かれているのを見つけた。(7:4-5)
 - a. この章は神がネヘミヤの心を動かし系図を記載するようにされた人々の登録記事で終わる。この理由の一つは、自分でイスラエル人、あるいはレビ人だと自称する人と、本当にそうである人とを区別することであったと思う。ネヘミヤにとっても誰が信用できるかできないかの判断は容易ではなかったはずである。
 - b. 新約時代になるとイエスは司祭、律法学者、パリサイ人など、外見は敬虔に見えても中身は邪悪な人々と向き合うことになる。
 - c. 敵の戦術はたいてい決まっていて、内部から分裂させるために光の天使を装い神の民の中に潜入してくる。初代教会においてもそのような例が見られた。
 - d. 今日、神に属する者のリストというのは簡単にはアクセスできない。私たちの名前が子羊のいのちの書に記されているかどうかを確かめるには聖霊と御霊の実に頼らなければならない。イスラエル人にとって最も悲しいことは自分の名前がいのちの書に記されていないことで、それは今の私たちにとっても同様である。その書に名前が記されるためにはまずイエス・キリストにいのちをささげることから始まる。自分に死に自分自身をイエスにゆだねることである。